

傳久寺便り

令和8年1月1日

162-0802 東京都新宿区改代町9

真宗大谷派 傳久寺

電話： 03-3268-6404

fax： 03-3268-6405

ホームページ

<http://www.denkyuji.or.jp>



御挨拶

新しい年を迎えられ、御健勝のことと存じ上げます。また、皆様方には、日頃より傳久寺に對しましてのご尽力、心より感謝申し上げます。昨年の5月には、宗祖親鸞聖人ご誕生850年・立教開宗800年・傳久寺開山400年記念法要を無事に勤修することができました。これもひとえに皆様方のお支えがあつてこそであると重ねて感謝申し上げます。

さて、新年を迎えるにあたり、私たちは一般的に「明けましておめでとうございませう」という文言を使いますが（勿論亡くなられた方がいらつした場合はその年はお使いしません）、果たして「明けまして」は「おめでとう」なのでしょうか。昔は年齢は数え年でありましたので、正月を迎えるということは、「また一つ無事に年を重ねることができた」というところを「おめでとう」と表現していたのですが、室町時代に生きられたとんちの一休さんで知られ

る一休宗純はこのような歌を残しておられます。

正月（門松）は 冥土の旅の 一里塚 めでたくもあり めでたくもなし

一休禅師はもともと禅宗の僧侶でしたが、晩年には浄土真宗の教えに帰依をされ、親鸞聖人をわが師として讃えたと言われています。また正月にはドクロ（頭蓋骨）を杖の先に付け、街中を「ご用心」と言いながら練り歩き、仏法の教えを伝えて回ったという逸話もあります。そこには一つ年を取るということとは、一歩一歩死に近づいているという道しるべでもあるという世の無常を説かれたわけです。その意味で正月を迎えるということはめでたくもあるが、めでたくもないとも言えるのかもしれませんが。

さて、私たちはこの歌を見てどのように感じるでしょうか。せつかくの正月からなんと不謹慎なと思う方もいらつしやるかもしれませんが、ですがこれは人間の道理をそのまま表した事実であります。正月であろうとなかろうと、私たちは必ず亡くなつていく身を頂いているわけです。しかし、そのことに目が向いていないのもまた私たちの有様ではないでしょうか。いつの間にか死のない生を生きているのが私たちではないかと思うのです。一休禅師の歌は、生きていることをいつのまにか当たり前にしている私たちに對して、当たり前ではないことを教えてくれているのではないのでしょうか。毎年を同じように過ごしてしまうのが私たちの姿ではありますが、二度と取り戻せない日々を送っている私たちです。文字通り命を削りながら過ごしているのが私たちです。だからこそ、まずはこの一年をぜひ道を求める年にしていただきたく存じます。



一休宗純

どこまでも自分自身の有様を見つめ、本当に生涯を尽くすという課題を与えてくださるのが仏教の教えです。今年もぜひ一緒に教えを尋ねてまいりたいと願っております。ぜひお寺の行事にもお参りください。

傳久寺行事予定表へ令和八年へ

修正会法要
しゅうしやうえ
一月 十七日 (土) 十二時

春季彼岸会法要
ひが ん え
三月 二十二日 (日) 一時

講師 瓜生 崇師

永代経法要
えいたいきやう
五月 十日 (日) 十一時

新盆法要
にいぼん
七月 十二日 (日) 一時

歓喜会法要
かんぎえ
七月 十五日 (水) 一時

(盆法要)

講師 渡邊 誉師

秋季彼岸会法要
ひが ん え
九月 二十日 (日) 一時

報恩講法要
ほうおんこう
十月 二十四日 (土) 十一時

講師 佐々本 尚師

※その都度、ご連絡申し上げる予定ですが、万一連絡がなかった場合も、

この予定表をご参照の上ご参加ください。

※日程・時間の変更がある場合がありますことをご了承ください。

※行事の無い月は、海 法龍氏(長願寺住職)を講師にお招きして、法話会
を開いております。ご興味のある方は是非お寺までご連絡下さい。

令和八年 年回表

一周忌	令和七年
三回忌	令和六年
七回忌	令和二年
十三回忌	平成二十六年
十七回忌	平成二十二年
二十三回忌	平成十六年
二十七回忌	平成十二年
三十三回忌	平成六年
三十七回忌	平成二年
四十三回忌	昭和五十九年
四十七回忌	昭和五十五年
五十回忌	昭和五十二年

ご法事とは、先立っていかれた大切な方のお心に遭遇し、そのお心を通して自分自身を改めて見つめ直していく大切な縁です。回忌数が増えるほど、お勤めをするお宅が少なくなるのは悲しい事です。お身内の方だけでもどうぞお勤めをし、お手を合わせていただけたらと思います。